

グローバル・ヒストリーと高校世界史

地歴・公民科 塚田 章裕

最近よく聞くグローバル・ヒストリーとはどのような意味であり、どのような特徴があるのか。またグローバル・ヒストリーは高校世界史に取り入れることが可能なのか。グローバル・ヒストリー研究について整理してみる。

キーワード：グローバル・ヒストリー 世界史 SGH

1. はじめに

2014年度から、本校は文部科学省からSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受けることとなった。そのなかで、本校では「教科のSGH化」という研究を行っている。

世界史は、科目の特性上、もともとグローバルな要素を含んでいる。しかし一方で、世界史は、一国史（ナショナル・ヒストリー）の寄せ集めという側面も否定できない。

最近、グローバル・ヒストリーという言葉をよく聞くようになった。このグローバル・ヒストリーとはどのような意味で、高校世界史にどのように取り入れることが可能なのだろうか。自分なりに整理してみたいと思う。

2. グローバル・ヒストリーとその特徴

最初に、今なぜグローバル・ヒストリーが注目を浴びているのか。水島司は「グローバル・ヒストリー研究の挑戦」（水島司 編『グローバル・ヒストリーの挑戦』）で、扱われているテーマのおもしろさとともに、次の4つをあげている。

- ①ソ連邦解体を経た1990年代以降の急速なグローバル化の進展。
- ②東アジアからアジア全域に広がりつつある奇跡とも呼ばれる急速な経済成長、とりわけ中国や

インドのグローバルパワー化。

③少なからぬ研究者が陥っている歴史学の「袋小路」から抜け出させる活路をグローバル・ヒストリーが提供しつつあるという歴史学自身の問題。

④地域研究や地域史の一定の成熟が歴史学の方法への疑問を昂じさせたという点。

水島は、このような変化は、従来の歴史認識と歴史への取り組み方を見直させ、それに応じた歴史研究の内容的変化を、次のように要請することとなった、と述べている（前掲書）。

- ①根強い国民国家史観あるいは一国史観と呼ばれる歴史からの脱皮。
- ②いかに小さな空間での歴史的事象であれ、国家の枠を超えた地域や地域間の連関への視点がその歴史的意味を理解するには不可欠であるという認識が共有されるようになったこと。
- ③時間枠を長くし、長期的な変化のなかに個別事象を位置づけることの意味も重視されるようになった。
- ④人類はたんにひとつの要素でしかないような、より広範な事象が歴史研究の対象となってきていること。
- ⑤事象の連関性の解明がより強く認識されるようになったこと。

こうした状況をふまえて、秋田茂・桃木至朗は『グローバルヒストリーと帝国』の中で、グローバル・ヒストリーを次のように定義している。

グローバルヒストリーとは、地球的規模での世界の諸地域や各人間集団の相互連関を通じて、新たな世界史を構築しようとする試みであり、近年、「社会史」や「国民国家批判」と並んで、世界中の学界で最も注目を浴びている歴史のとらえ方である。

そして、次のように説明している。

とりわけ歴史学界の外部における、外交と国際政治、経済や環境など現代のグローバルな諸問題を考える動きに与えたインパクトは大きい。研究方法の背後にあるメタレベルの世界認識に目を移して、たとえば社会史が一九世紀的な「政治」と「文化」を基軸とした歴史認識への違和感から出発し、国民国家批判が「言語論的転回」など啓蒙主義的認識論への疑いに支えられているとすれば、グローバルヒストリーの世界観は「分割可能で互いに独立した個がまず存在し、それが集まって全体ができる」という物質観もしくは存在論でなく、最初から素粒子が存在する「場」やそこに働く「力」を問題にするという、物質界への量子力学的な認識と並行すると言ってよいだろう。

では、グローバル・ヒストリーにはどのような特徴があるのだろうか。水島司『グローバル・ヒストリー入門』では次のように述べられている。

①あつかう時間の長さ

これまでであれば考古学の範囲であった有史以前の人類の誕生から現在までをあつかうことはもとより、場合によっては宇宙の誕生までもが対象に含まれる

②対象となるテーマの幅広さ、空間の広さ

従来の歴史研究ではほとんどあつかわれることなかった分野に対象が拡大し、歴史変動におけるそれらのはたした役割の重要性に目を開かされることになる。また、対象空間も、ユーラシア大陸やインド洋世界というように、陸域、海域全体の構造や動きを問題とすることが多い。一国史と呼ばれるような一つの国に限定された分析で終始することはなく、たとえ小さな地域を事例として取り上げたとしても、より広域の諸関係のなかに事例をいちづけるということが意図される。

③従来の歴史記述の中心にあったヨーロッパ世界の相対化、あるいはヨーロッパが主導的役割をはたした近代以降の歴史の相対化である。そこでは、しばしばヨーロッパの歴史的役割や先進性の意味が再検討され、それとの対比で、従来重視されてこなかった非ヨーロッパ世界の歴史や、そこでの歴史発展のあり方が重視される。

④たんなる地域比較で終わるのではなく、異なる諸地域間の相互連関、相互の影響が重視される点である。例えば、あるモノや制度が、ある地域でどのように生み出されどのような役割をはたしたかということだけではなく、それらをつうじて諸地域が相互にどのような連関した歴史的動きを示したかという点が重視される。

⑤あつかわれている対象、テーマが、従来の歴史学ではほとんど取り扱われてこなかったものが多く、歴史学に新たな視覚をもたらすものであることである。従来、戦争や政治、経済活動、宗教、文化などがおもなテーマであったのにたいして、疫病、環境、人口、生活水準など、われわれの日常に近い、しかし社会全体や歴史変動のあり方全般にかんする重要な問題が新たに取り込まれている。

そして、水島は先ほどの「グローバル・ヒストリー研究の挑戦」で、グローバル・ヒストリーの具体的な領域・研究として、①世界システム論、②人

類史, ③環境史, ④疫病史, ⑤人やモノの動きの歴史, ⑥生活, ⑦地域史・地域システム, ⑧アジアとヨーロッパ, ⑨帝国の9つをあげている。

それでは, このグローバル・ヒストリーは, 何か問題点はないのだろうか。羽田正は『新しい世界史へ』で次のように指摘している。

グローバル・ヒストリー研究の成果には, 英語圏の人たちの旧来からの世界観や歴史認識がそのまま入り込んでおり, その叙述には素直に従うわけにはゆかない場合がある。欧米では, 比較的最近までヨーロッパと非ヨーロッパの過去は, 歴史学と東洋学という別々の学問の枠組みの中で論じられ, 両社は同じ範疇の研究とはみなされていなかった。このため, 日本ではすでに常識となっているヨーロッパ史と非ヨーロッパ史を組み合わせるという発想自体が新しく感じられがちだ。従来のヨーロッパ史の解釈を維持したままでそこにアジアなどの非ヨーロッパの歴史を組み込めば, それがグローバル・ヒストリーだと捉えられることもあるようだ。

また, 地球規模の人間の歴史という捉え方ではなく, 元来バラバラだった世界が経済的に一体化してゆく過程を描くのがグローバル・ヒストリーだと説かれることもある。これは私の考える新しい世界史とは立場が異なる。

したがって, グローバル・ヒストリー的な方法を採用すれば, 何でも新しい世界史になるとは考えないでほしい。地球社会の世界史を構想するためには, 新しい世界観と歴史認識が必要である。それらを伴わないグローバル・ヒストリーは, 現行の世界史の亜流でしかない。

羽田は現行世界史の問題点として, 次の3つをあげている(前掲書)。

- ①現行の世界史は, 日本人の世界史である。
- ②現行の世界史は, 自と他の区別や違いを強調す

る。

③現行の世界史は, ヨーロッパ中心史観から自由ではない。

それらを踏まえ, 新しい世界史の描き方として, 次の3つを提案している(前掲書)。

①世界の見取り図を描く

ある時期の世界の人間集団を横に並べてその特徴を比較し, モデル化して相違点と共通点を指摘しながら全体像を把握することで, 世界の見取り図を描く。どこかを中心に絵を描くのではないこの方法によって, ヨーロッパ諸国がみな同じ特徴を持っていたわけではないこと, また, 「ヨーロッパ」と「非ヨーロッパ」の単純な二分法で世界史を説明できるわけではないことが明らかとなるだろう。

②時系列史にこだわらない

上の方法で作成した人間集団を横に並べた世界の見取り図を時代ごとにつか作って提示し, それらを現代世界の全体像やその特徴と比較する。その際, これらの見取り図を時系列によって連続的, 通時的に理解して現代につなげようとしなくてよいことがポイントである。あくまでも一枚一枚を現代と比較するのである。そうすれば, 概念と現実の入り混じった独特の「ヨーロッパ」史が, 時系列的に立ち上がってくることはなくなるだろう。

③横につなが歴史を意識する

世界中の人々が, モノや情報と通じて緊密につながり互いに影響を与えあっていたことを説得的に示す。これによって, 地球上の人々は横につながって活動しており, 「ヨーロッパ」が単独で存在し, 動いていたわけではないことが理解できるはずだ。

また, 秋田茂・桃木至朗はグローバル・ヒストリー研究において, そのキイとなる概念は, 「比較」と「関係性」であると述べ, 次のように説明している(前掲書)。

比較史については、マルクス主義による「世界史の基本法則」や大塚久雄の「大塚史学」は、相互の関係性を軽視しただけでなく、大小様々な国家や民族を同一の土俵上で単純に比較した点に根本的な欠陥を抱えていたため、それらが希求した近代化の展望を、一部の国・民族についてしか示せなかった。いっぽう関係性は、前近代の「東西交渉史」や戦争と外交の歴史（交渉史・通交史）、近代の植民地支配・帝国主義とナショナリズムなどの研究においてそれぞれ取り扱われてきた。しかし、交渉史や植民地支配の歴史は「日中」「仏越」など二国間関係しか見ないものが大半で、関係性の背後にある「場」やそこに働く「力」には鈍感だった。

4. おわりに

グローバル・ヒストリーという言葉をよく聞くようになり、様々な書籍を読んで、自分なりにまとめてみた。これらの研究を、自分の授業に直接取り込むことはなかなか難しいと思うが、グローバル・ヒストリーの視点を持って授業を行うことは可能だろう。これから努力していきたい。

〔参考文献〕

- ・水島司 編『グローバル・ヒストリーの挑戦』（山川出版社 2008年）
- ・水島司『グローバル・ヒストリー入門』（世界史リブレット127）（山川出版社 2010年）
- ・羽田正『新しい世界史へ』（岩波新書 2011年）
- ・秋田茂・桃木至朗『グローバルヒストリーと帝国』（大阪大学出版会 2013年）